

鹿児島県南西沖における軟骨魚類の延縄収集

○木下 克利 , 森 徹
海の中道海洋生態科学館

海の中道海洋生態科学館では 2006 年より、鹿児島県笠沙町沖（水深約 140-160m）において、深い海の水族展示を目的に、刺し網漁乗船による調査および収集を実施している。

刺し網による捕獲は生物の外傷が著しく、2006 年 6 月に行った 5 回の収集で得られた 7 種 35 個体の生残率は、予備水槽に収容するまでに 54.3%と低かった。このため、同年 12 月からは、捕獲収容のダメージを軽減するために漁獲方法を延縄に変更した。

収集は、刺し網の漁師に漁具の製作と船の借用を依頼し、合計 6 回実施した。漁具は、全長 2400mの延縄に、470 本の針を取り付けた。また餌は、キビナゴとイカを使用した。その結果、エドアブラザメ、ノコギリザメ、フトツノザメ、ギンザメ等 9 種 392 個体を捕獲した。

これらの内、輸送と飼育に適した大きさや体調で選別した 9 種 108 個体を、海水氷で 17 に水温調整し緩やかに純酸素を通気した漁船の水槽に収容し港まで持ち帰った。港では活魚トラックの水槽(水量約 3.2 m³)に収容し、館に輸送するまでの 3 日間備蓄した。トラック水槽では、ろ過循環と水温を 17 に調整し、プロアによる緩やかな通気を行った。また、フトツノザメが底砂に胸鰭を刺し着底する行動が観られることより輸送水槽の底面には、擦過傷軽減と静寂な環境を確保するために、細かい珪砂を敷き詰めた。また、日光による紫外線を遮断するため点検窓は目張りをし、暗黒な環境を確保した。備蓄中は、1 日に 3 回の頻度で、トラックに装備した点検用モニターで、短時間照明を点灯して状態観察を行った。輸送は、備蓄中の飼育環境を保ちながら陸送した。また、館の予備水槽の水温 15 に調整して収容した。これらの結果、予備水槽に収容するまでの生存率は 96.3%に改善することができた。